

覆われている。摘出時舌側骨膜との一部癒着をみたが、摘出は比較的容易であった。病理組織学的には線維芽細胞の増殖と線維化が認められ線維腫と診断された。

13. 比較的短期間に発育したと思われるエナメル上皮腫の1例

山田 進, 道谷弘之, 金沢正昭
(東日本学園大・口外1)

村瀬博文, 富田喜内
(同・口外2)

賀来 亨 (同・口腔病理)

通例エナメル上皮腫は、再発例は別として病変発見以前の状態がX線的に観察された報告例は、われわれが渉猟し得た範囲では認められなかった。今回われわれは、41歳男性の左下大白歯部に見られたエナメル上皮腫で、その4年9か月前、左下第三大白歯残根抜歯時のX線像では、本腫瘍の存在を疑わせる所見は認められず、その後比較的短期間に発育増大したと思われるエナメル上皮腫の1例を経験したのでその概要を報告した。

14. 左下顎切除後40年に再発した軟部 ameloblastoma の1例

宇野弘成, 細野隆也, 高橋喜久雄
土屋晴仁, 石山信之 (千大)

40年前は初発で、今回その再発と思われたエナメル上皮腫を経験したので報告した。症例は69歳、女性。約40年前、下顎骨半側切除術施行されたが、平成2年4月頃より頬部の腫張を自覚したため来院。口腔内および側頭窩下に腫瘤を認め、試験切除により上記診断を得たので同年7月全麻下にて周囲軟組織を含んで腫瘤を摘出した。病理組織分類はWHO分類で濾胞型、石川の分類では口腔内腫瘍はⅡ型、側頭窩下部腫瘍はⅢ型であった。

15. 口腔扁平上皮癌における核DNA ploidy pattern の検討

今井 裕 (獨協医大・口外)

口腔扁平上皮癌34例について、核DNA定量を行い、臨床ならびに病理所見と比較検討したので報告した。方法は生検パラフィンブロックより切片作製(50 μ)の上、ペプシン処理後ホモゲナイザーにて細胞単離し、PI染色して顕微蛍光核DNA定量を行なった。その結果、核DNA量の解析は、臨床、病理所見と相応し、悪性度の指標や予後の推測に、有益な情報を得る補助手段の1つとなり得ることが示唆された。

16. Sjögren 症候群におけるサイトカインの局所産生の検討

西村 敏, 松田由紀子, 小田泰之
鈴木 円, 田中孝佳, 奥津誠次郎
中島由貴, 工藤逸郎

(日大・歯・口外1)

齊藤一郎, 茂呂 周

(日大・歯・病理)

12例のSS唾液腺生検材料を用い、T細胞の増殖に関与するADF, IL-2R, IL-2, IL-1 β の発現とEBVとの相関についてPCR法ならびに酵素抗体法, in situ hybridization (ISH)法を用いて検討した。その結果、PCR法ではEBVのコピー数の上昇に伴い、ADF, IL-2R, IL-2の発現量の増加を認め、酵素抗体法とISH法ではEBVとADFが共に導管上皮細胞に局在を示し、このことからIL-2R, IL-2の発現にEBV感染細胞から産生されるADFが関与していることが示唆された。

17. 多発性嚢胞腎により腎不全に陥った口腔顔面指趾症候群の1例

甲原玄秋 (千葉県こども病院・歯科)

口腔顔面指趾症候群の14歳の女性を治療した。腹痛を主訴に紹介され、諸検査にて末期腎不全が判明し、腹膜透析が施行された。口腔内の奇形、齶歯のため歯科を紹介された。本症の多発性嚢胞腎合併例は1964年の報告後僅か21例で本邦では1例である。本疾患では腎エコーによる多発性嚢胞腎を検索し、その疑いがあれば貧血、高血圧、尿路感染症、腎不全などの予防、治療のため定期管理の必要があることが判明した。

18. Ca拮抗剤服用による歯肉増殖症8例の病態

勝見行雄, 渡辺泰秀, 吉田英彦
高原正明, 佐藤研一 (千大)

Ca拮抗剤による歯肉増殖症は臨床像においては全例に歯肉からの出血、排膿が認められ、辺縁性歯周炎に極めて類似しているが、病理組織学的所見においては上皮脚の延長、上皮の肥厚が著明であり、上皮下には炎症細胞浸潤と著明な毛細血管の増生が認められた。コラーゲンの増生は特に顕著とはいえなかった。治療においてはブラッシング指導、歯石除去などの保存的治療では完治困難であり、薬剤の中止変更を行なったほうが良いと考えられた。